



齋藤雅典 編著

「菌根の世界」

出版社：築地書館，2020 年

興味をかき立てられる本である。菌根という、普遍的ではあるけれどもあまり知られていない共生体を扱っているが、それらがどのように陸上の緑を支え、ひいては生物界全体に影響を及ぼしているかについて、地歴的な観点も含めて解説されている。植物学に興味をもった若い読者に是非読んでもらいたいと思って、子供の通う高校の図書室に推薦したところ、もう既に購入予定リストに入っていた。カバーと口絵に掲載された美しい写真を見ただけでも、植物や生物に興味をもつ読者たちは中を読むのが楽しみになるに違いない。

役に立つ本である。一般向けの平易な文体でありながら菌根菌の分類・進化・形態・機能について最新の知見も盛り込みながら解説されている。菌根について、あるいは微生物と植物の関係について、さらには自然界における植物のあり方（生き方）について関心を持つ読者にとって、コンパクトで要点を押さえた最良の入門書になると思う。

タイトルの「菌根の世界」は、「菌根研究者の世界」を含意しているのかもしれない。ここには「菌根（菌）」という不思議な、でも普遍的な生物を扱う 7 人の菌根研究者（マイコライゾロジスト）達が、いかに菌根（菌）に魅せら

れそれらに深い愛情を抱いているかといった個々の物語が綴られている。また、先人たちがこの不思議な生き物にどのように向き合ってきたかといった「菌根研究史」も随所に散りばめられている。このことは、菌根の世界にとどまらず、広く自然科学研究の世界を志す読者にとって、いくつかのモデルを提示している。

見開きや目次に書かれているように、菌がいないと生長できない植物、植物がいないと生きていけない菌類、果てはキノコなどの菌類を消化吸収して養分を得ている植物など、この本には一見とても不思議な世界が描かれている。でもその多くは特別なものでも珍しいものでもなく、我々の足元に普通に息づいているものたちである。この本を読んだことをきっかけに、野外に出て普通の土・普通の根をもう一度見直してみよう、という読者の方が増えるのではないか、そのような期待を抱かせてくれる本である。

大友 量（農業・食品産業技術総合研究機構）